

## 東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	アジアの発掘口琴チェックリスト(6):薄板状の口琴(5)と湾曲状の口琴(4)
Title in another language	Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (6) - Lamellate Harps (5) and Bow-shaped Harps (4)
Author(s)	直川礼緒 (TADAGAWA Leo)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 11, p. 35-46
Date of issue	2022-03-29
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	<a href="https://tcm-minken.jp/publication/IE_B11202104.pdf">https://tcm-minken.jp/publication/IE_B11202104.pdf</a>

## アジアの発掘口琴チェックリスト(6): 薄板状の口琴(5)と湾曲状の口琴(4)

Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist(6) - Lamellate Harps(5) and Bow-shaped Harps(4)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれたのだろうか。これまで「アジアの発掘口琴チェックリスト」では、5回にわたりアジアとその周辺地域で発掘された口琴の確認を行ってきた。

本稿では、その第6回目として、これまで取り扱ってきた出土口琴の中でも、特に中国の遼寧省、陝西省石峁、山西省の薄板状の口琴の発掘例に関する追加情報を検証する。また、陝西省長安で発掘された、前漢の湾曲状口琴とされる遺物の、現時点での情報を確認する。

キーワード: 口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、  
古代楽器 Ancient musical instruments、北方アジア Northern Asia

2016年に第一部を始めた本稿「アジアの発掘口琴チェックリスト」では、これまで5回にわたり、アジアとその周辺地域で発掘された薄板状の口琴83例<sup>113</sup>、湾曲状の口琴29例、どちらか不明のもの1例を検討してきた。その中には、詳細が未発表のもの、発表されているが本稿中で詳細の記述を行うに至っていないもの、詳細不明なものなどが含まれており、更なる調査の継続が不可欠であることは既に述べた。また、連載中に新たに発見や報告がなされた例や、詳細情報が新たに判明した例なども少なくなく、これまでの拙稿における各口琴の仮の通し番号は、いずれ再検討を要することも明らかである。

特に中国では、まさしく口琴であるはずの遺物が以前から存在していたにも関わらず、それが口琴であることさえ正しく認識されることなく、「梭（機織りのシャトル）」（内蒙古自治区 [01]、直川 2016）、「ヘアピン」（山西省 [80]、後述）、「釘」（黒竜江省 [106]、直川 2020a）などと誤った同定がなされてきたことから判るとおり、近年までほとんど注目される存在ではなかった。それが、陝西省榆林市神木県にある石峁（シーマオ）遺跡で発掘された、二十本を越す骨製の薄板状の口琴群（直川 2020a）を境に流れが変化した様子である。石峁の口琴は、その数の多さ、およそ四千年前という年代の古さ<sup>114</sup>、そして2018年5月22日の公式発表時点ですでに口琴であると正しく認識されていたこと<sup>115</sup>などの様々な要因が重なるとともに、中国における初期王朝の形成過程を見直す必要をもたらし遺跡自体の重要性（角道 2016）と、それを踏まえた上でのユネスコ世界遺産への登録に向けた中国側の動き（陝西日報 2019）などとも相俟って、世界中にもその存在が知られることとなった<sup>116</sup>。その結果、中国国内で出土していた同様の形状をもつ遺物が改めて見直され、文化の広がりや繋がりを探る手掛かりとしての出土口琴の重要性が再認識されるとともに、口琴の音楽考古学的な研究が積極的に行われるようになってきた。

本稿では、そのような新しい研究成果を参照しつつ、これまで取り上げてきた発掘例（直川 2016, 2017, 2018, 2020, 2021）の情報の補遺を行うことから始める。

## 7a. 中国遼寧省 Liaoning, China [12, 13, 84] (補遺)

2021年8月に出版された、方建軍による、新石器時代<sup>117</sup>から、孔子の時代<sup>118</sup>にかけての中国の口琴を取り上げた論文 (Fang 2021) では、遼寧省朝陽市の骨製の出土品がどのようにして口琴であると同定されたのか、その経緯が述べられている。

それによれば、方は1987年に、遼寧省で発掘された石磬や陶埴を中心とする調査のために朝陽市博物館を訪れ、その際に、学芸員に3本の骨製品を見せられたという。それらを口琴であると同定したこと、これが中国考古学界に口琴が存在したことが確認された最初の事例となったこと、後の2008年までの間にこの判断が公式に認定されたことが述べられている<sup>119</sup>。

方は陝西省宝鶏市で発掘された、「簧」の字の記された墨書竹筒 [14] に関する考察 (方 2008) の著者であり、同論考中では、朝陽の口琴については触れてはいたものの、何例あったのかは正確には記されていない (「1987年に少数の口琴を視察した」とのみ記されている。直川 2017: 57 および同 66 註 33)。それが、実際には3本あったことが公表されたことになる。

本稿中で [13] とした、(fig. 16) (直川 2017: 58) 下の小型の口琴については、遼寧省朝陽市建平県水泉遺跡の T22 発掘ユニットで発見された夏家店下層文化に属するとされ、発掘地点の情報が追加されている。

また、同じ地点で発掘された、口琴の「ブランク」が一点あったことも述べられている。この「ブランク」は、口琴の製作途中の状態のもの、おそらく骨の素材から、大体の楽器の形状が形づくられている段階にある (例えば、アルタイのチュルトコーフ遺跡出土の [54, 55]<sup>120</sup> のような) 物だと思われるが、残念ながら写真は掲載されていない。こちらを新たに [84] とする。

さらに、本稿中で [12] とした (fig. 16) (同) 上の大きい方の口琴は、同じく遼寧省朝陽市建平県水泉遺跡で発掘されたものであること以外、考古学的なコンテクストが欠如している、とのこと。

口琴のサイズについても、新しい情報が記されている。それによれば、

[13] (Fang 2021 では T22-16) は、全長 82mm<sup>121</sup>、両端の幅が 5～10mm、弁の長さ 62mm、厚さ 0.6mm<sup>122</sup>。

[12] (同 77-208) は全長 93mm、両端の幅 10～16mm、弁の長さ 54mm、厚さ 0.6mm。

半完成品の [84] (同 T22-20) は全長 84mm、幅 6～13mm で、「真っ直ぐな」弁を持つとしている (が、どのような状態なのかいま一つ不明瞭)。

方によれば、T22 ユニットは、夏家店下層文化 (紀元前 2300～1600 年ごろ、すなわち石峁遺跡とほぼ同時代) の中期に属すると考えられるとし、殷王朝 (紀元前 1600 年頃～紀元前 1046 年頃) 初期との関連を示唆している。

なお、上記 [12][13] および内蒙古自治区赤峰の夏家店上層文化遺跡より出土の [01] (直川 2016: 57-58) については、劉喆が復元製作をおとした実験考古学的なアプローチを試みており、その成果を沈陽音楽学院修士論文として発表している (劉 2020)。

## 16a. 中国陝西省 2 Shaanxi, China 2 [57 ~ 79] (補遺)

2019年7月に行われた国際シンポジウム「石峁皇城台考古新発見暨口簧国際研討会」に参加した際に実見することが叶った、石峁遺跡の皇城台のすぐそばにある収蔵施設に保管されていた発掘口琴は、当時は写真撮影も禁止されているほどのものものしい規制であったが(直川 2020a: 44-47)、その後、インターネット上などで、少しずつ情報が公開されるようになってきた。中でも最も重要なものが、中国の考古学雑誌に掲載された、この発掘調査の責任者である陝西省考古研究院の孫周勇による論考(孫 2020)だろう。

これによると、口琴の出土は2017年から2018年にかけてのことであり、石峁遺跡の中心的存在となるピラミッド状の構造物である「皇城台」の東擁壁の北部にある獐子畔(アナグマ畔)とよばれるテラス状の部分上部の堆積層、いわば4000年前のゴミ捨て場のようなところを中心に、多数の龍山時代後期の陶器片、石、動物の骨などととも、21本<sup>123</sup>が発掘されたという。

皇城台東擁壁北部上部の獐子畔は全長120mほどあり、これを10mずつ12のセクションに区切って発掘が行われた。その結果、第4セクションから12件、第3セクションと第1セクションから各2件、そして第2、8、10の各セクションからそれぞれ1件の、計19件が出土。他に、皇城台の門の跡の北側に2件発見され、合計21例の発見となった。そのうち2例は完品であり、他は、弁や杵の一部が失われた残欠である。

素材は、牛の肋骨の薄片であり、口琴の振動弁の根元側の杵には、紐を通すための穴が開いている。長辺の端に、ちょっとした左右対称のくびれを入れてあるものが見られる。中には、杵の長辺全体に鋸の刃を思わせる刻みを入れたものや、先端を尖らせたり、全体に網目状(あるいは山形)の模様を施したものなど、デザイン性に富むものも見受けられる。

代表的なものとして、6例が写真入りで掲載されている。以下、主として報告記事を参照しつつ、他の資料の、より鮮明な写真の観察結果をも加えて書き留めておく。

[57]「獐子畔1セクション④:1」<sup>124</sup> 完品で、長辺の両端に、円弧状の左右対称のくびれがある。振動弁の付け根側が、先端よりも僅かに狭い。表面は平ら。論考に記載された採寸は、全長79mm、幅11mm、厚さ1mm<sup>125</sup>(fig. 76)。直川 2020aで[57(仮)]としていたものと同一の口琴。

[58]「獐子畔1セクション④:2」 完品。振動弁の根元側の長辺の端に、丸みを帯びた三角形の左右対称のくびれがある。振動弁の形状の特徴として、付け根側が先端よりも狭くなっているのが、[57]より顕著に見られる。表面は平ら。側面の写真を見る



fig. 76 中国陝西省石峁遺跡出土の口琴 [57]。Xinhua News 2019より



fig. 77a, b 中国陝西省石峁遺跡出土の口琴 [58]。孫周勇 2020より

と、全体がかなり湾曲している。全長 87mm、幅 12mm、厚さ 0.8 mm (fig. 77 a, b)。

[59]「獾子畔 1 セクション⑤ : 1」 杵部分は残っているが、振動弁が根元から失われている。長辺の両端に、丸みを帯びた不等辺三角形の左右対称のくびれがある。表面は平ら。全長 87mm、幅 16mm、厚さ 0.8 mm (fig. 78)。

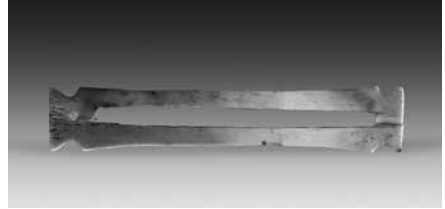


fig. 78 中国陝西省石峁遺跡出土の口琴 [59]。孫周勇 2020 より

[60]「獾子畔 4 セクション④ : 1」 杵の大部分は残っているが、振動弁と、振動弁の付け根側の杵の一部が欠如している。長辺の両側に鋸歯状の刻み模様が入っている。この刻みは、よく見ると一定間隔ではなく、またハート形をしたものなど、様々な意匠に富んでいる。弁の先端側の端の左右対称の刻みは、最も深く、外（短辺）方向に向かって斜めに入れられている。残存部の全長は 63mm、幅 11mm、厚さ 1mm (fig. 79)。

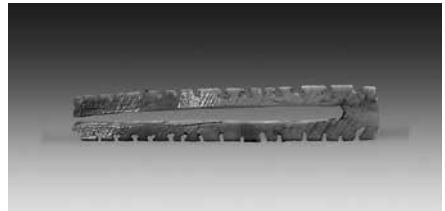


fig. 79 中国陝西省石峁遺跡出土の口琴 [60]。孫周勇 2020 より

[61]「獾子畔 4 セクション④ : 2」 振動弁（付け根側）の一部と、杵の一部の残欠。弁の大部分と、杵の一部は失われている。杵の両側の長辺上には、振動弁の付け根側の一番端に、比較的大きな三角形の刻みが左右対称に入っているほか、小さな三角形の刻み模様が複数入っている。片側（写真では下側）の刻みは、振動弁の付け根側の間隔が狭く、振動弁の先端側に進むにしたがって幅広くなる。反対側（上側）の刻みは、1・2・2 の数で、一定間隔を置いている。こちら側の破損～先端部の欠如は、この刻みを切っ掛けに起こったものと考え得る。全体に湾曲しており、その反りの内側の、糸を通すための穴の周辺には、6 本程度の直線が刻まれている。うち 4 本は、向かい合う長辺同士を結ぶ形。2 本は、短辺側から大きい三角形の刻みに向けて、斜めに入っている。穴の様子がよく観察できる。残存部の全長 53mm、幅 11mm、厚さ 1 mm (fig. 80 a, b, c)。



fig. 80a, b 中国陝西省石峁遺跡出土の口琴 [61]。孫周勇 2020 より（ここではあえて 180 度回転はしていない）

[62]「獾子畔 3 セクション④ : 1」 振動弁（付け根側）の一部と、杵の一部の残欠。弁の先端部と、杵の一部は失われている。振動弁の付け根側の先端は、角が斜めに切り落とされている。そのすぐ近くに、斜めに大きく左右対称の三角形の刻みが鋭角に入れられ、矢印のような形に形成されている。通常の紐を通すための穴の他に、より小さな穴が 3



fig. 80c 同上 [61]。Xinhua News 2019 より。口琴杵に付された番号は、孫による論考中とは少々異なる（本文では「獾子畔 4 段④ : 2」だが、楽器上の表記は「獾子畔 4 段④ C」となっている）。

つ、三角形を形成するように矢印形の先端部が開けられている。さらに、表面には、全体に渡って大きな網目、あるいは山形の模様が入れている。残存部の全長 74mm、幅 15mm、厚さ 0.7 mm (fig. 81)。

孫は、発見された 21 個の口琴のほとんどは、使用中に振動弁や杵が破損し、放棄された残骸の可能性を指摘している。また、口琴の他に、口琴の製作途中段階と思われる、細長い湾曲した研磨骨片もいくつか見つかっており、それらの厚さと幅は完成した口琴よりもわずかに大きく、また彫刻した跡があるという。このことは、一万本を超える骨針、鏃、錐などの発掘とも考えあわせ、皇城台の上層に存在していた、骨器制作の工房でこれらの口琴が作られた可能性がある、とする(孫 2020:48)。

また、口琴の多くが発掘された、皇城台の東擁壁北部の獮子畔上部の堆積層のうちでも第 4 層からは、骨の他にも陶器、石、翡翠などの遺物が何万点も発掘され、中でも口琴と同時代の陶器に、双頭の鬲(レキ=三脚の器)、太い柄の豆(トウ=高杯)、罍(カ=酒を温める三脚の器)、盃(カ=注酒器)、甗(ゲン=煮沸用具)、三脚の瓮(オウ=甕)など、河套地域<sup>126</sup>の龍山時代後期の陶器の典型的な特徴を持っている、とする。そして、口琴と同じ層で発掘された獣骨が、オックスフォード大学による年代測定の結果、紀元前 2135 ~ 1941 年と判定され、従って石峁の口琴の時代は紀元前 2000 年頃の龍山時代後期であると結論付けている(同)。

この論考には写真の掲載されていない石峁の口琴が、先述の劉(劉)の修士論文に三例掲載されているので、追加しておきたい。劉によれば、これらの写真は、2019 年 9 月の神木でのシンポジウムの、孫による口頭発表「早期口簧的发现与研究——从石峁考古发现说起」中のものである(劉 2020: 34、**図 41**)。なお、採寸および分類番号等の詳細は不明である。以下は、筆者による写真の観察記録である。

[63] 振動弁(付け根側)の一部と、杵の一部の残欠。弁と杵の一部は失われている。杵の両側の長辺上には、振動弁の付け根側の一番端に、円弧状の左右対称のくびれがある(fig. 82)。

[64] 振動弁(付け根側)の一部と、杵の一部(片側)の残欠。弁と杵の半分程度は失われているが、紐を通すための穴は残っている。両端のくびれは観察できない(fig. 83)。

[65] 杵の残欠。振動弁と、振動弁の付け根側の杵の一部が失われている。振動弁の先端側の杵の長辺の端に、丸みを帯びた三角形の左右対称のくびれがある(fig. 84)。



fig. 81 中国陕西省石峁遺跡出土の口琴 [62]。孫周勇 2020 より



fig. 82 中国陕西省石峁遺跡出土の口琴 [63]。劉喆 2020 より



fig. 83 中国陕西省石峁遺跡出土の口琴 [64]。劉喆 2020 より



fig. 84 中国陕西省石峁遺跡出土の口琴 [65]。劉喆 2020 より

この他、直川 2020a 中の (fig. 43) で掲載した写真には、上記に含まれない口琴の杵の残欠が 4 例見える。これらを仮に [66 ~ 69] としておく (左列上から、[62][63][66][67]、右列上から [68][60][61][69] となる)。

[66] 杵の片側の残欠。一端に、円弧状のくびれがある。

[67] 杵の片側の残欠。一端に、円弧状のくびれがある。[66] よりも少々長い。

[68] 杵の残欠。振動弁と、振動弁の付け根側の杵の一部が失われている。振動弁の先端側の杵の長辺の端に、不等辺三角形の左右対称のくびれがある。

[69] 杵の残欠。振動弁と、振動弁の付け根側の杵の一部が失われている。杵の端のくびれは観察できない。

これ以外の口琴 (の残欠) に関しては、現時点では情報がない。本稿では、それらを [70 ~ 77] とするに留める。いずれにせよ、石峯の口琴の全体像を見渡すことができる報告書の発行が俟たれる。また、その際には、本稿でもあらためて番号を振りなおす必要が出てくることも考えられる。

他の地域の出土品には見られない石峯の口琴の特徴として (ただし山西省陶寺の口琴を除く<sup>127</sup>)、杵の両端あるいは一端に見られる、左右対称のくびれが挙げられる。これは、単にデザイン上の問題なのか、それとも何らかの目的があって手間かけて作り出されたものなのか。この点について少々考察を加えておきたい。

ひとつの可能性として、インドネシアのバリ島の椰子製の口琴ゲンゴンに見られるくびれ/刻みが参考になるかもしれない。

紐で引く薄板状の口琴の場合、弁を振動させるために、かなりの力で紐が引かれる。持続的な強さというよりは、一瞬の衝撃の繰り返しである。この力に対抗して、持ち手側 (振動弁の先端側) の杵は、しっかりと保持する必要がある。ただし、単にしっかりと固定するのではなく、演奏時、水平方向にはしっかりと保持し、演奏者の前後方向には、杵が自由に振動するように緩く持つ必要がある (この「杵の前後方向の振動」が生じないと、弁が正しく振動しない。これが、弾くタイプの口琴との、持ち手部分の作りの違いである。紐で引くタイプの薄板状の口琴の、振動弁の先端部分付近の杵は、短く薄く形作られているのに対し、弾くタイプの薄板状の口琴の同じ部分は、分厚く作られており、それに連続する長い持ち手を持つ場合も多い)。

この問題を解決するために、「把手/持ち手」の役割を果たす紐や布を、杵の端に取り付けることがある。例えばアイヌの竹製の薄板状の口琴ムックリの場合は、弁の先端側の杵の端に、長さ 100mm 程度の紐を輪にして取り付ける。輪を取り付ける位置は、杵の、振動弁の先端が納まっている穴の部分を利用することもあれば (fig. 85 上)、杵にもうひとつ別の穴を開け、そこに通すこともある (fig. 85 下)。この輪を、楽器を持つ方の手 (通常は利き手とは反対の手) の薬指や小指などにひっかけて、横方向の力に対抗する。

ゲンゴンの場合、少々異なる方法で紐や布などが取り付けられているものが見受けられる。例えば、杵の持ち手側の先端付近に、左右対称の刻み

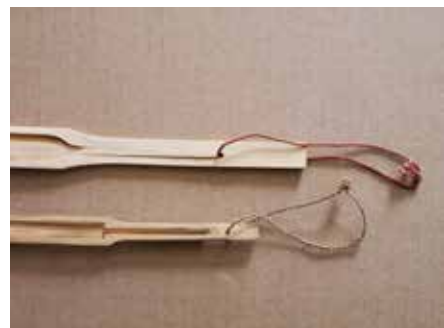


fig. 85 持ち手側の紐の取り付け方。ムックリの場合

を入れ、そこに紐を結び付けたのちに輪にしたり (fig. 86 上)、細長く切った布 (fig. 86 上から2番目) や椰子の葉 (fig. 86 下から2番目) を、杵の先端を包み込む形に折り、それを左右対称の刻みを利用して紐で縛り付けた後に、折り返してハンドルとする (fig. 86 下) のである。

これらの仕掛けにより、水平方向に引っ張られる力に対してはしっかりと、同時に前後方向へは自由に動くように保持することが可能になる。そして、この仕掛けを固定するために必要となるのが、杵の先端部の左右対称の刻み、という訳である。

しかしながら、この説は、[57][59][68] などに見られる、弁の先端側の杵の端の刻み／くびれを説明するには有効であるが、石峯の口琴のほとんどに見られる、弁の付け根側 (引き紐を結ぶ穴のある側) にある刻みの説明には役立たないように思われる。[58] のような、弁の付け根側にしかこの刻みがないものの存在に至っては、この説明が正鵠を得ていないことを示唆しているとも思える。さらなる検証と考察が必要である。



fig. 86 持ち手側の紐の取り付け方。ゲンゴンの場合

## 17a. 中国山西省 Shanxi, China [80] (補遺)

一昨年の本論考 (直川 2020a) 中で保留としておいた、山西省南部の臨汾市襄汾県にある陶寺遺跡の公式の発掘報告書である『襄汾陶寺: 1978~1985年考古発掘報告』を確認することができたので、情報を記しておく。全4冊1713ページの大部の報告書中、口琴に関する記述は6行のみ (中国社会科学院考古研究所山西隊、山西省臨汾市文物旅游局編著 2015: 363)。しかも、「口琴」(「口弦琴」) の語は一切登場することがなく、この遺物は「发卡 (ヘアピン)」と同定されている。

そこでは、この遺物が「茶色がかった黄色で、非常に薄い骨片でできており、横長の長方形で、両側に凸状の端があり、中央に丸い穴があること。中央に幅 2-3mm<sup>128</sup> の別のピンがあり、そのピンが杵に接続して (切り出されて) いて、このピンが上下に反ること。現代のヘアピンに近い形状であること」が述べられており、採寸は全長 83mm、厚さ 1mm とされ、実測図 (fig. 87) と写真も別ページ (p. 364 および図版 147) に掲載されている。

2015年のこの報告書の発行時点ではヘアピンと考えられていた遺物が、同遺跡からの出土品の選集となる『中国陶寺遺址出土文物集萃』(中国社会科学院考古研究所、臨汾市旅游發展委員会編著 2018) では口琴(「口弦琴」)と同定し直されているのは、おそらく、比較的近距离にある石峯の口琴の出土の影響があるのだろう<sup>129</sup>。

なお、方によれば、この口琴は、放射性炭素年代測定によって紀元前 2140 年から 1946 年までとされる

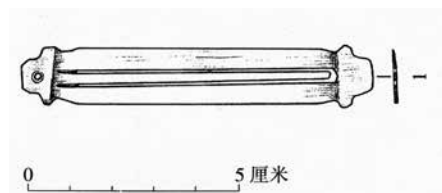


fig. 87 山西省臨汾市襄汾県の陶寺遺跡出土の薄板状の口琴 [80] の実測図。中国社会科学院考古研究所山西隊、山西省臨汾市文物旅游局編著 2015 より。原本では、右に 90 度回転させた状態



井戸から出土したとのこと。これは、年代的に明らかに石峁の口琴と一致する、としている。

また、陶寺遺跡の命名のもととなった、龍の絵が描かれた陶板と多くの副葬品を含む五基の大きな墓からは、鱗皮の太鼓や陶製の太鼓、石磬などは発掘されたものの、口琴の出土は見られなかったとのことである (Fang 2021: 98)。

## 26a. 中国陝西省 3 Shaanxi, China 3 [129] (補遺)

昨年の本論考 (直川 2021) 中で未確認情報として挙げておいた、中国陝西省長安 (現西安) の湾曲状の鉄製口琴の情報が、少し分かってきたので書き留めておく。

この口琴は、2017年8月10日から11月19日にかけての約三ヶ月間、湖北省の省都武漢の湖北省博物館で開催された、口琴をテーマとした特別展「初音——世界口弦文化艺术展」(湖北省博物館 2017) に出品されたものであった。この企画は、50を越える国と地域の、200例以上の口琴の民族例の展示と、中国各地の少数民族の口琴奏者によるコンサートなどの関連イベントを伴う大掛かりなものであったようである。

この特別展についての記事は、湖北省博物館の公式サイトをはじめインターネット上に散見され、中には、当該の長安の口琴の写真 (fig. 88) を掲載したもの (楚地拾遺 2017) や、この出土品を様々な角度から撮影して製作した3D画像のアニメーションを掲載しているもの (四维時代科技 2017) もある。後者のアニメーションに付された解説の大意は、次のようなものである。

「時代：西漢王朝

発掘地：中国陝西省の前漢王朝<sup>130</sup>の長安城未央宮遺跡

本体サイズ：全長72mm、幅27mm<sup>131</sup>

展示解説には、ひどく錆びて腐食しているが、口琴の形状は完全であり、杵(本体)と振動弁が観察できる、とされている。杵と弁とは一緒に形成されており、溶接痕は見られない。金属組織分析の結果、錳の他、真鍮の成分と少量の硫化物も含まれていることを確認。三叉部の外側の金属組織は、フェライトとパーライト。炭素含有量は約0.4%で、鍛造の痕跡や混じり物はない。」

特に後半の、馴染みのない単語が並んでいる上に、特に鍛造の痕跡に関して誤解があるように思われる記述があるのは措くとして、ここでより重大な問題は、杵と弁とが「一緒に形成されている」としている点にある。他のネット上の記事を見ても、「世界で唯一の金属製で一体型」であることに言及するのはもとより (苗 2017、楚地拾遺 2017)、「杵と弁とを溶接した後のない、世界唯一の金属製鍛造の一体型口琴」を目の当たりにしたことを強調する論調の記事 (喻 2017) までも存在している。

ここには、様々な誤解が複雑に絡み合っていると思われる。

まず、湾曲状の口琴の振動弁は、多くの場合「カシメ」による。振動弁を、杵の環状部



fig. 88 中国陝西省長安城未央宮遺跡出土の口琴 [129]。楚地拾遺 2017より。原本では、右に90度回転させた状態

底部に切った「ホゾ穴」に差し込み、両側の壁を叩いて固定するのである（接着剤を使うことはない<sup>132</sup>）。熟練した製作者ほど、隙間が見えないほど正確に合わせる。弁が溶接されることなどほとんどなく、あるとすれば、口琴のことをよく知らない作者によるものだ、と言い切れるほどである。なので、溶接痕が見当たらないのは当然と言えば当然。

次に、湾曲型の口琴の最大の特徴は、弾力のある鋼素材の振動弁を、弾力の無い軟鉄（や真鍮など）の枠に取り付けることであり、弁と枠とが同一素材であることはまずないと言ってよく、ましてや弁と枠とが一体型の湾曲状口琴は、余程極端な物しか例を見ない<sup>133</sup>。

そして何より、写真を観察する限り、弁の基部付近に枠を叩いて潰した痕跡が確認でき、振動弁を枠の環状部底部にカシメて取り付けていることが明白である。

前漢は、時代的には紀元前 206 年から紀元後 8 年までの間であり、もしこの口琴が、本当に前漢のものであるならば、現時点で最古の湾曲状の口琴である、ロシア沿海地方アンドリアノフ居住地の鞣鞞の遺跡から出土した紀元後 5～6 世紀の口琴 [101] を、一気に 500 年以上抜き去ることになる。しかしながら、この口琴の形状に関するあまりにも不正確な記述を見ると、年代に関してもどこまで信用できるのか、疑問が生じる。

この「前漢の口琴」の発掘に関する、考古学的な報告書はまだ見つけることができず、今後の大きな課題としたい。

## 第 6 部のおわりに

今回は、これまでに挙げてきた出土口琴の、補遺情報のアップデートに終始してしまった。アジアにおける口琴の発掘例の研究が、まだ始まったばかりのものであり、世界各地の考古学研究者の口琴に対する意識が高まれば、さらに新しい発見も期待できそうなことは、中国考古学界をはじめとする様々な人々の間で、出土口琴に対する意識の高まりを見ると実感できる。とはいえ、不正確な情報の拡散の恐れが常にあるように感じるのも事実である。気を引き締めて、出土口琴の正確な事実を可能な限り求めていきたい。

次稿では、第 3 部で図版を紹介した 3 本の 10 世紀の日本埼玉県口琴の詳細情報確認を行い、アジアの発掘口琴のまとめと考察を行う予定である。

### 註：

- 113 陝西省宝鶏市で発掘された「簧」の文字を伴う墨書竹筒 [14] は、本稿の第 2 回目（直川 2017: 59-60）では、薄板状の口琴に限るべき番号を振ったが、実際に中に収められていた（はずの）口琴は失われており、それが薄板状のものか湾曲状のものであったのかを判断する確証は現時点では得られないため（形状的には薄板状のものである可能性は高いが）、どちらか不明の 200 番台、あるいは口琴ケース単体として 300 番台を振るのが妥当だと考える。
- 114 遼寧省朝陽市の水泉遺跡の例（直川 2017、本稿）とともに、現時点で世界最古の発掘例であるといえる。
- 115 とはいえ、発掘当初はこれらの同じ形状を持った骨の薄い板状の遺物は、考古学者にとって当惑の対象であり、「櫛かへアピンではないかと推測」された様子がか

- がわれる (Larmer 2020)。
- 2019年7月末に神木市で開催された国際シンポジウム「石峁皇城台考古新発見暨口簧国際研討会」(直川 2020a: 44-47) でお会いした Kirie Stromberg 氏 (同註 85) によれば、同氏が拙稿の存在を、当地の考古学者達に教えたとのことであった。期せずして時宜を得て開始した拙稿も、石峁の口琴の鑑定に関して一役買っていたとすれば、非常に喜ばしいことである。
- 116 日本でも、先述した NHK BS の世界のニュースでの報道 (直川 2020a: 44) の他に、新華社 (Xinhua News 2019)、ナショナルジオグラフィック電子版 (Larmer 2020) などの大手メディアによっても配信された。
- 117 中国ではおよそ紀元前 7500 年から 1500 年にかけて。
- 118 孔子 (紀元前 511-479)、春秋時代。
- 119 そしてこの事例が、自身の研究 (方 2008) を経て、コルトヴェイト (Kolltveit 2016)、直川の研究につながっていった、と記している。
- 120 直川 2018. 56, fig. 29.
- 121 原文では、cm で表記。
- 122 コルトヴェイトの採寸 (直川 2017: 58) とは微妙に異なる。
- 123 例えば Xinhua News (新華社通信) 2019 のように、23 本とする記事も見られたが、公式見解は 21 本ということになった模様である。このため、直川 2020a では、[57 ~ 79] を予定していたが、[78] と [79] は欠番となる。
- 直川 2020a: 45 の (fig. 43) に見られるように、破損した口琴の残欠のようなものも多く、膨大な量が発見された (孫 2020: 45-46) という獣骨片から、口琴を同定するまでには、紆余曲折があったのだろう。
- 124 これらの番号の振り方は、基準がいまひとつ不明。文脈から判断すると、例えば「獾子畔 1 セクション④ : 1」は、「獾子畔の第 1 セクションの第④層で発掘されたもののうちの第 1 号」と読むべきであろうと思われるが、そうすると第 1 セクションからの出土品が [57][58][59] の少なくとも 3 例が存在することになり、本文中の「第 1 セクションから 2 件」という記述と矛盾する。いずれにせよ、詳細が俟たれる。
- 125 原文では、cm で表記。
- 126 中国北西部で黄河上・中流が「几」の字のような形で大きく湾曲して流れる地域。
- 127 陶寺の口琴の場合は、くびれ/刻みというよりは、突起が形成されている。
- 128 原文では、cm で表記。
- 129 採寸も、直川 (2020) に記した通り、全長 84mm、幅 13mm、厚さ 1mm と見直しが行われている (全長が 1mm 増え、幅の情報が追加された)。
- 130 中国では「西漢」と呼ばれる。
- 131 原文では、cm で表記。
- 132 接合部の錆を防ぐために、充填剤として接着剤を流し込むことは、現代の製作者に見られる場合がある。
- 133 例えば、鋼の薄板から、枠と一体の振動弁を切り出し、枠部分のみ厚みのある素材で裏打ちするロシアの製作者による例に近いが、これとて、裏打ちの部品を後から取り付けているので、「一体型」とは言い切れない。直川 2020b: 11 参照。

参考文献：

楚地拾遗.

- 2017 少数民族的脑洞：竹片、铁片的 freestyle——口弦琴. 每日头条. 8.14.  
<https://kknews.cc/culture/og4bzb6.html> (参照 2022.1.21).

方, 建军. (方, 建军.)

- 2008 秦墨书竹筒与乐器“簧”. 交响—西安音乐学院学报. no. 1. p. 32-39.

Fang, Jianjun. (方, 建军.)

- 2021 The Jew's Harp in China, from the Neolithic to the Age of Confucius. Klänge der Archäologie: Festschrift für Ricardo Eichmann. Harrassowitz Verlag. p. 97-103.

湖北省博物馆.

- 2017 《初音——世界口弦文化艺术展》在湖北省博物馆开幕. 湖北省博物馆 / 湖北省文物考古研究所, 临时展览. 8.11.  
<http://www.hbwww.org/Views/Detail.aspx?PNo=Exhibition&No=LSZL&Guid=d94d11ef-01cd-479c-85cf-f6bd3a78c83e&Type=Detail> (参照 2022.1.21).

角道, 亮介.

- 2016 陕西省榆林市神木县石峁遗迹の発見と若干の問題. 駒澤大学文学部研究紀要第 74 号. p. 95-102.

Kolltveit, Gjermund.

- 2016 Jew's Harps of Bone, Wood and Metal: How to Understand Construction, Classification and Chronology. Studien zur Musikarchäologie X, Orient-Archäologie 37. p. 63-73.

Larmer, Brook.

- 2020 4千年前の中国・石峁遺跡、謎のヒスイと要塞. (訳: 牧野建志). ナショナルジオグラフィック 8.23.  
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/081700471/>  
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/081700471/?P=2>  
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/081700471/?P=3> (参照 2022.1.21).

刘, 喆.

- 2020 音乐考古学视野下中国出土口簧研究——以辽宁建平水泉、赤峰夏家店出土口簧为主要考察对象. 沈阳音乐学院硕士学位论文.

苗, 滢.

- 2017 从远古走来的“魔笛”，藏着怎样的秘密？. 弘博网/每日头条, 8.16.  
<https://kknews.cc/culture/zxljy3a.html> (参照 2022.1.21).

陕西日报.

- 2019 我市石峁遗址被列入《中国世界文化遗产预备名单》. 榆林要闻, 5.15.  
<http://yl.gov.cn/xwzx/ylywe/50505.htm> (参照 2022.1.21).

四维时代科技.

- 2017 奏响了人类音乐文明「初音」的它，现在却濒临失传，每日头条. 11.9.  
<https://kknews.cc/news/jmz8vyq.html> (参照 2022.1.21).

孙, 周勇.

- 2020 陕西神木石峁遗址出土口簧研究. 文物. 第 764 期. p. 44-53.

直川, 礼緒.

- 2016 アジアの発掘口琴チェックリスト(1): 薄板状の口琴(1). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 5. p. 57-70.
- 2017 アジアの発掘口琴チェックリスト(2): 薄板状の口琴(2). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 6. p. 57-68.
- 2018 アジアの発掘口琴チェックリスト(3): 薄板状の口琴(3)と湾曲状の口琴(1). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 7. p. 55-66.
- 2020a アジアの発掘口琴チェックリスト(4): 薄板状の口琴(4)と湾曲状の口琴(2). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 9. p. 41-56.
- 2020b 口琴とは何であるのか～その分類と、構成要素. 日本民俗音楽研究所紀要. 第1号. p. 8-28.
- 2021 アジアの発掘口琴チェックリスト(5): 湾曲状の口琴(3). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 . vol. 10. p. 23-37.

Xinhua News. (新華社通信.)

- 2019 石峁遺跡出土の原始楽器、先史ユーラシア文化交流の証しに. AFP BB News, 9. 26.  
<https://www.afpbb.com/articles/-/3246084> (参照 2022.1.21).

喻, 珮.

- 2017 古代中国“口琴”首次“视听化”进入公众视野. 新華社/中國日報, 8.14.  
[http://ent.chinadaily.com.cn/2017-08/14/content\\_30598456.htm](http://ent.chinadaily.com.cn/2017-08/14/content_30598456.htm) (参照 2022.1.21).

中国社会科学院考古研究所, 臨汾市旅游發展委員会 編著.

- 2018 中国陶寺遺址出土文物集萃. 天津古籍出版社.

中国社会科学院考古研究所山西隊, 山西省臨汾市文物旅游局編著.

- 2015 襄汾陶寺: 1978~1985年考古發掘報告. 文物出版社.

In this sixth part of the successive articles, section 7a complements information about the lamellate Jew's harps from Liaoning Province, China, according to the newly published articles. Section 16a overviews some of the examples from Huangchentai, Shimao site, Shaanxi Province, China, unearthed during the excavation from 2017 to 2018, according to other new articles. It also gives new information on the lamellate Jew's harp Taosi site, Shanxi Province, in section 17a. Section 26a discusses the bow-shaped example from Chang'an, Shaanxi Province, which is declared to be from the Western Han (202 B.C. – 8 A.D.).

(本学付属民族音楽研究所共同研究員、日本口琴協会代表)